

学術

生命という概念を軸にして 文化の諸相を切り取る

中立的な眼差しによって文化の大きなうねりを俯瞰

金森 修

鈴木貞美 著

生命観の探究

重層する危機のなかで 5・30刊 A5判913頁 本体7600円 作品社



もの深い大著である。四言字にしたらいったい何故くらくらになるのだろうか。鈴木さんが『大正生命主義と現代』や『生命』で『現代日本近代』などの著作によって、大正期を中心とした時期の文学作品や文化を生命という切り口で扱ってみせたのが九〇年代半ば頃。それから数年した二〇〇〇年代初頭には榊井基次郎

の『宗教の重要性の相対的低下』という一般論が存在するにもかかわらず、やはり生命思想の根柢には古来、宗教が表現してきていたものと融合、合体する要素が多いという事実だ。せっかく、生命思想という軸で極括しようとしている著者が、は迷惑なことかもしれないが、宗教が文化に与えている

一種汎在的な生氣に改めて触れたように思った。ともあれ、生命という概念を軸にして、文化の諸相を切り取ろうとするのを根本的なスタンスとして設定したうえで、鈴木さんは関連調査領域を野放図なまでに広げている。進化論の導入、近世東洋の自然哲学、現代の芸術や武道思想、そして現代の自然保護思想などが、視野拡大の果てに見えてくる風景だ。

たまたま、最も細かい分節がなされているのは、やはり大正生命主義という概念でまとめあげられていたもの、つまり日本の二〇世紀前半を中心とした文芸、思想運動の総体である。例えば短歌にはほとんど知識のない私のような人間には、若山牧水や斎藤茂吉などの紹介はとも勉強になった。

これほど広い領域のものを扱っている本を、あれもあつちも、これもあつちもと書くと、さういふ面が書けていない。ここでは、あつちの一部分に特化して、それを比較的詳しく見ておこう。ここでは私が例証としてあげてみたいのは『生命主義の発露』(第9章)である。まずは、島崎藤村の『家』の位置づけ。自然主義については、私もうはかなり詳しく調べ、その後、我が国の自然主義、田山花袋、若野泡鳴や徳田秋声などをもっと通読しておいた。その調査の過程で、『家』を通読したときには、とても面白いという印象をもったのは今でも覚えている。日本の自然主義が結局、一種の私小説に収斂していくという通説を念頭に置きながら、著者は『家』を、自ら主義の代表的作品としてながらも、その流れから見ればむしろ逸脱し、孤絶したものだ

とみる。半封建的な家族制度と、そのなかでもかく個人という構図は、まさに『家』そのものの世界だが、同時にこの小説は『悪血』への怯えという最も重要な主題にも触れている。さらに、この本の議論の特徴の一つなのだが、『家』を極めて広々と扱う姿勢によって、『家』と個別の小説作品から中国やヨーロッパ中世の封建制度への言及へとく自然に話を広げることが可能になっている。視点の急速な拡大が当然のように遂行されやすい空間が、当初から作られているというのだ。これは、数ある文芸評論が、精緻である分、時に極めて矮小化された知的空間に閉居しているという印象を与えるものとは、ちよと逆のものになっている。

そもそもこの第9章自体が、こんな風に個別の文学作品から議論を起ししながら、永井荷風の優生学、アジア文学を背景に抱えた文化相対主義、それから反転した日本主義や国粹主義へと議論をつなげている。そこで行われている視座のすばらしい跳躍に、場合によっては眩暈さえ覚えるほどだ。他の人にも是非、この運動感を味わってほしい。

ただ、ここでは詳れない。一つ付け加えたいことがある。もともとそれは、これまでも著者がきたことの『メタルの裏側』に過ぎないのかもしれないのだが、全体として、ほとんどの本でありながら、少し記述が淡白だという逆説的な印象が、本書全体から滲み出している事実である。恐らくは、あまりに多くのものを『家』に入れたらどう、まさにその事実から来るものなのだろう。もう少し書いてほしいと思つてくるので切り上げられているような感じがする。だが、壮大な議論の拡大が自然になされていたというのには、今までもってきた通りなのだが、同時にそれは、議論が時に簡明すぎるままに終わるといふことを意味している。たわけだ。この特徴は、この本全体の議論場の設定自体から出てくるものであり、その意味では、鈴木さん個人の責任ではない、とささげたい。この本は、一種の壮大な教科書として使えるのではないかと。文化史、文学史、思想史など、いろいろな場面で、である。今の大学先生にこれを一年で全部読めたら、大部分が逃げてしまつたかもしれない。と、ささげたい。

証としてあげてみたいのは『生命主義の発露』(第9章)である。まずは、島崎藤村の『家』の位置づけ。自然主義については、私もうはかなり詳しく調べ、その後、我が国の自然主義、田山花袋、若野泡鳴や徳田秋声などをもっと通読しておいた。その調査の過程で、『家』を通読したときには、とても面白いという印象をもったのは今でも覚えている。日本の自然主義が結局、一種の私小説に収斂していくという通説を念頭に置きながら、著者は『家』を、自ら主義の代表的作品としてながらも、その流れから見ればむしろ逸脱し、孤絶したものだ

とみる。半封建的な家族制度と、そのなかでもかく個人という構図は、まさに『家』そのものの世界だが、同時にこの小説は『悪血』への怯えという最も重要な主題にも触れている。さらに、この本の議論の特徴の一つなのだが、『家』を極めて広々と扱う姿勢によって、『家』と個別の小説作品から中国やヨーロッパ中世の封建制度への言及へとく自然に話を広げることが可能になっている。視点の急速な拡大が当然のように遂行されやすい空間が、当初から作られているというのだ。これは、数ある文芸評論が、精緻である分、時に極めて矮小化された知的空間に閉居しているという印象を与えるものとは、ちよと逆のものになっている。

そもそもこの第9章自体が、こんな風に個別の文学作品から議論を起ししながら、永井荷風の優生学、アジア文学を背景に抱えた文化相対主義、それから反転した日本主義や国粹主義へと議論をつなげている。そこで行われている視座のすばらしい跳躍に、場合によっては眩暈さえ覚えるほどだ。他の人にも是非、この運動感を味わってほしい。

ただ、ここでは詳れない。一つ付け加えたいことがある。もともとそれは、これまでも著者がきたことの『メタルの裏側』に過ぎないのかもしれないのだが、全体として、ほとんどの本でありながら、少し記述が淡白だという逆説的な印象が、本書全体から滲み出している事実である。恐らくは、あまりに多くのものを『家』に入れたらどう、まさにその事実から来るものなのだろう。もう少し書いてほしいと思つてくるので切り上げられているような感じがする。だが、壮大な議論の拡大が自然になされていたというのには、今までもってきた通りなのだが、同時にそれは、議論が時に簡明すぎるままに終わるといふことを意味している。たわけだ。この特徴は、この本全体の議論場の設定自体から出てくるものであり、その意味では、鈴木さん個人の責任ではない、とささげたい。この本は、一種の壮大な教科書として使えるのではないかと。文化史、文学史、思想史など、いろいろな場面で、である。今の大学先生にこれを一年で全部読めたら、大部分が逃げてしまつたかもしれない。と、ささげたい。

ほとんどの本でありながら、少し記述が淡白だという逆説的な印象が、本書全体から滲み出している事実である。恐らくは、あまりに多くのものを『家』に入れたらどう、まさにその事実から来るものなのだろう。もう少し書いてほしいと思つてくるので切り上げられているような感じがする。だが、壮大な議論の拡大が自然になされていたというのには、今までもってきた通りなのだが、同時にそれは、議論が時に簡明すぎるままに終わるといふことを意味している。たわけだ。この特徴は、この本全体の議論場の設定自体から出てくるものであり、その意味では、鈴木さん個人の責任ではない、とささげたい。この本は、一種の壮大な教科書として使えるのではないかと。文化史、文学史、思想史など、いろいろな場面で、である。今の大学先生にこれを一年で全部読めたら、大部分が逃げてしまつたかもしれない。と、ささげたい。

ほとんどの本でありながら、少し記述が淡白だという逆説的な印象が、本書全体から滲み出している事実である。恐らくは、あまりに多くのものを『家』に入れたらどう、まさにその事実から来るものなのだろう。もう少し書いてほしいと思つてくるので切り上げられているような感じがする。だが、壮大な議論の拡大が自然になされていたというのには、今までもってきた通りなのだが、同時にそれは、議論が時に簡明すぎるままに終わるといふことを意味している。たわけだ。この特徴は、この本全体の議論場の設定自体から出てくるものであり、その意味では、鈴木さん個人の責任ではない、とささげたい。この本は、一種の壮大な教科書として使えるのではないかと。文化史、文学史、思想史など、いろいろな場面で、である。今の大学先生にこれを一年で全部読めたら、大部分が逃げてしまつたかもしれない。と、ささげたい。

ほとんどの本でありながら、少し記述が淡白だという逆説的な印象が、本書全体から滲み出している事実である。恐らくは、あまりに多くのものを『家』に入れたらどう、まさにその事実から来るものなのだろう。もう少し書いてほしいと思つてくるので切り上げられているような感じがする。だが、壮大な議論の拡大が自然になされていたというのには、今までもってきた通りなのだが、同時にそれは、議論が時に簡明すぎるままに終わるといふことを意味している。たわけだ。この特徴は、この本全体の議論場の設定自体から出てくるものであり、その意味では、鈴木さん個人の責任ではない、とささげたい。この本は、一種の壮大な教科書として使えるのではないかと。文化史、文学史、思想史など、いろいろな場面で、である。今の大学先生にこれを一年で全部読めたら、大部分が逃げてしまつたかもしれない。と、ささげたい。

ほとんどの本でありながら、少し記述が淡白だという逆説的な印象が、本書全体から滲み出している事実である。恐らくは、あまりに多くのものを『家』に入れたらどう、まさにその事実から来るものなのだろう。もう少し書いてほしいと思つてくるので切り上げられているような感じがする。だが、壮大な議論の拡大が自然になされていたというのには、今までもってきた通りなのだが、同時にそれは、議論が時に簡明すぎるままに終わるといふことを意味している。たわけだ。この特徴は、この本全体の議論場の設定自体から出てくるものであり、その意味では、鈴木さん個人の責任ではない、とささげたい。この本は、一種の壮大な教科書として使えるのではないかと。文化史、文学史、思想史など、いろいろな場面で、である。今の大学先生にこれを一年で全部読めたら、大部分が逃げてしまつたかもしれない。と、ささげたい。

出版のお手伝いをします

小説、俳句、短歌、エッセイ、評論、紀行文、学術論文やジャンルを問わず。自分で自分を文字によって表現しようとして原稿をお持ちの方、書店への配本を含めて、ご相談のりまします。

03-3234-3471 FAX 03-3261-4837 e-mail LEN05632@nifty.nc.jp

ノンフィクション

図書新聞出版部